

コモンウェルスの絆

— 女学校小説におけるスカウト運動

志 渡 岡 理 恵

1. はじめに

19世紀末のイギリスで誕生した新しい文学ジャンルである女学校小説の一番の人気作家アンジェラ・ブラジル (Angela Brazil) の『学校のために』(*For the Sake of the School*, 1915) は、地理的な広がりを持った作品である。舞台となるのはウェールズにある女学校、そこにニュージーランドから新入生がやってきて、キャンプファイア・ガールというアメリカ発祥の野外活動を通して、さまざまな知識、技能、価値観を身につけていく。

表面的なプロットだけをたどると、他愛ない学園小説のひとつのように見えるこの作品だが、登場人物のナショナリティや作中で言及される地名に注意しながら、当時の政治・社会的コンテクストにおいて読み解いていくと、そこには少女たちに対する社会からの要請が色濃く織り込まれていることが見えてくる。それは、『学校のために』のみならず、A.ブラジルの他の女学校小説はもちろん、多くの女学校小説にも当てはまることである。

女学校小説をはじめとする少女小説の政治性については、長らく本格的な研究がなされてこなかった。しかし、近年、サリー・ミッチェル (Sally Mitchell) の画期的な著書『新しい少女——イングランドの少女文化 1880年から1915年まで』(*The New Girl: Girls' Culture in England, 1880-1915*, 1995) の刊行を機に、ジェイン・ポーター (Jane Porter) やジェイニー・ハンプトン (Janie Hampton) らが20世紀の少女文化と戦争の関係に注目した研究書を相次いで上梓した。2011年にはミシェル・スミス (Michelle Smith) が『イ

ギリスの少女文学・文化における帝国 1880年から1915年まで』(*Empire in British Girl's Literature and Culture: Imperial Girls, 1880-1915*)において、女学校小説やガール・ガイド小説などの少女小説ばかりでなく、少女雑誌をはじめとするさまざまな少女文化と帝国主義の関係を包括的に論じている。

A. ブラジルの女学校小説については、少女小説・文化をとりあげた研究書ではほぼ必ず言及されるものの、まだ単独での研究書は存在しない。『学校のために』に関する研究もいまだなされていないのが現状である。しかし、この小説は、第一次世界大戦中に出版され、作中には軍隊のイメージが多用されているばかりでなく、1907年にイギリスの植民地から自治領になったばかりのニュージーランドからウェールズの女学校に新入生がやって来て、他の学友たちと衝突を繰り返しながら、最終的に学校に溶け込んでいくまでのプロセスを描いており、20世紀初頭の少女文化と戦争および帝国との関係を考えるうえで、大変重要な作品である。

本稿は、とくに『学校のために』において描かれているキャンプファイア・リーグというスカウト運動の一種に注目し、この少女育成組織の理念と活動内容を確認したうえで、作品が発するメッセージを、当時の政治・社会的コンテクストの中で読み解いていく。その主眼は、政治性とは一見無縁に見える20世紀初頭の女学校小説に、「市民教育」によって宗主国と植民地が協力していく土台を築くよう呼びかける社会からの要請を読み取り、この小説が、後にコモンウェルスと呼ばれるイギリスと(旧)植民地の連合体の形成を予感させる側面を持つ、という解釈を提示することにある。

2. ウッドランズ校——ピクチャレスクな「楽園」

アンジェラ・ブラジルの女学校小説の特徴をふたつ挙げるなら、地名に政治的な意味が付与される場合があることと、舞台となる女学校の設定に当時の女子教育改革の実践が反映されていることである¹。『学校のために』においても、これが当てはまる。最初に、この作品の舞台となる女子寄宿学校ウッドランズ校(The Woodlands)がどのような場として設定されている

のか確認しておきたい。

ウッドランズ校は、ウェールズ西部アベライロン市 (Aberaeron) のグラナフォン (Glanafon) からフェリーで川を下ったところにある。ウェールズといえば、18世紀後半に、ウィリアム・ギルピン (William Gilpin) の『ワイ河および南ウェールズのいくつかの地域等についての考察、主にピクチャレスクな美との関連において——1770年夏』(*Observations on the River Wye and Several Parts of South Wales, etc. Relative Chiefly to Picturesque Beauty; Made in the Summer of the Year 1770, 1782*) の刊行などにより、ピクチャレスク・ツアー (picturesque tour) の目的地として一躍人気となった場所である。平田雅博によれば、炭鉱や鉄工場のある「東南部ウェールズは非詩的で敵対的ともなった地域で」、「イングランド旅行者にとってもっと魅力的なウェールズの地域は北部と西部であった」(21-2)。ウッドランズ校が位置しているのは、労働者の多いウェールズ東南部からは離れた、主に産業革命に起因する多くの社会問題の見えにくい、牧歌的な地域である。

『学校のために』では、「ピクチャレスクなウェールズ」というイメージが冒頭から前景化され、ウッドランズ校は田舎の緑溢れるのどかな美しい場所として提示されている。グラナフォン駅からフェリー乗り場までの景色は以下のようなものである。

Any admirer of scenery would have been struck with the lovely and romantic view which burst upon the eye as the travelers left the platform at Glanafon and walked down the short, grassy road that led to the ferry. To the south stretched the wide pool of the river, blue as the heaven above where it caught the reflection of the September sky, but dark and mysterious where it mirrored the thick woods that shaded its banks. Near at hand towered the tall, heather-crowned crag of Cwm Dinas, while the rugged peaks of Penllwyd and Penglaslyn frowned in majesty of clouds beyond. The ferry itself was one of those delightful survivals of medievalism which linger here and there in a few fortunate corners of our isles. (5-6)

天空の青と兩岸の森の緑が映る川の周囲には「ごつごつした」(“rugged”) 山々の頂が聳えている。「ごつごつした」という形容詞は、ピクチャレスクのキーワードのひとつである。列車が走り去ってしまえば、“It seemed to take the last link of civilization with it, and to leave only the pure, unsullied country behind” (5) と、そこには「文明」とは切り離された「無垢な」空間が広がっている。

ひとことで言えば、ウッドランズ校は3つの山々に守られた「楽園」(“paradise”)、「保護区」(“sanctuary”)である。

“Penllwyd, Penglaslyn, and Glyder Garmon, those lofty peaks like three strong Welsh giants, seemed to guard the entrance to the enchanted valley, and to keep it a place apart, a last fortress of nature, and sanctuary for birds and flowers, a paradise of green shade and leaping waters, and a breathing-space for body and soul.” (7-8)

この一節の最後にある「心と身体がほっと息をつく場所」という表現には、1870年代以降のイギリス社会全体に広がった「オープンエア療法」の影響が感じられる。戸矢理衣奈によれば、新鮮な空気を積極的に取り入れて健康を維持・回復しようという「オープンエア療法」は、タイトレイシングなどで健康状態の悪化が深刻化していた女性たちにとりわけ強く勧められていた。アンジェラ・ブラジルの他の女学校小説においても、“ventilation, sea baths, and suitable diet were her three watchwords” (*The New Girl at St. Chad's* 27) というように、校長が標語に掲げるほどオープンエアの重要性は意識されている。そして、そんなウッドランズ校に寄宿する女生徒たちは、“It was the cult at The Woodlands to idolize nature and the picturesque” (5) と、ピクチャレスクな学校を心から愛し、誇りに思っている。

ウッドランズ校の建物とスタッフの特徴は、ともに古い時代と新しい時代のよい点を兼ね備えていることである。建物はチューダー朝のものだが、18世紀から19世紀にかけて増改築されたため、古風で趣のある外観を

保ちながら、近代的な設備も備えている。1階は教室として、2階は寮として使われている。この寄宿学校を所有しているのは、ミス・ボーズ (Miss Bowes) とミス・テディントン (Miss Teddington) という対照的なふたりの女性で、ミス・ボーズは、小柄でずんぐりした白髪の母親を思わせるような女性であり、家政、衛生、経営を担当している。彼女は、生徒の両親に手紙を書いたり、会計簿をつけたり、商人とやりとりしたりすることを日常の仕事としている。温厚な性格で、生徒の話に思いやりをもって耳を傾けるので、生徒たちから人気がある。一方、ミス・テディントンは、ミス・ボーズよりはるかに若く、背の高いスポーツ好きな女性で、競技やアウトドア・スポーツを担当している。数学が得意で、考古学や自然観察にも興味があり、生徒たちを引率して外に連れ出す役割を担っている。妥協を許さない性格であるため、生徒には最善を尽くすことを求め、厳しい一面もあるが、公正でユーモアのある「新しい女性」(New Woman) である。

このように、主人公アリス (Ulyth) が寄宿するウッドランズ校は、外界の喧騒から切り離された、ピクチャレスクでロマンティックな「楽園」のような場所である。一時的にはあるものの、「家」から離れ、「娘」の役割に縛られず、個人として同世代の少女たちと向き合う場。そこではカリキュラムに野外活動やスポーツなどが組み込まれ、48人の女生徒たちは「新しい女性」の予備軍となる「新しい少女」に成長することを期待されている。彼女たちはこの学校でどのような教育を受け、どのような価値観を学んでいくのだろうか。

3. 少女雑誌が繋ぐもの——ニュージーランドからの新入生

女学校小説では「新入生もの」は定番である。アンジェラ・ブラジルの他の小説においても、アメリカやアイルランドなどからの新入生がさまざまなトラブルを巻き起こしながら、最終的には学校に溶け込んでいくプロセスが描かれている。『学校のために』も同様に、ウッドランズ校にニュージーランドから新入生がやって来るところから物語が展開していく。新入

生は、アリスの文通相手のローナ (Rona)。アリスとローナは、少女雑誌を通じてペンフレンドとなった。以下は、アリスが学友たちにこのニュースを伝えている場面である。

“Do you mean that girl you were so very proud of corresponding with? I forget how the whole business began,” broke in Stephanie Radford.

“Don’t you remember? It was through a magazine we take. The editor arranged for readers of the magazine in England to exchange letters with other readers overseas. He gave me Rona. We’ve been writing each other every month for two years.”

“I had an Australian, but she wouldn’t write regularly, so we dropped it,” volunteered Beth Broadway. “I believe Gertrude had somebody too.”

“Yes, a girl in Canada. I never got farther than one short letter and a picture post card, though. I do so loathe writing,” sighed Gertrude. (4)

アリスほど長続きしなかったものの、バスにはオーストラリアに、ガートルードにはカナダにペンフレンドがいた。彼女たちはみな同じ雑誌を讀んでいて、それぞれが雑誌の編集者に紹介されて海外にペンフレンドを持っていたのである。19世紀後半以降、イギリスでは多くの少女雑誌が刊行されたが、この一節からは、雑誌というメディアを通してイギリスと（旧）植民地の少女たちが文化を共有し、手紙のやりとりによって繋がり、絆を築いていたことがうかがえる。

しかし、手紙を通しての交流は、アリスに幻想を抱かせ、結果的に彼女を失望させることになる。アリスはローナと2年間にわたり毎月手紙のやりとりをしていたにもかかわらず、アメリカの西部を舞台にした映画からローナ像をつくりあげていた。

Ulyth had once seen a most wonderful film entitled “Rose of the Wilderness,” and though the scenes depicted were supposed to be in the region of the Wild

West, she decided that they would equally well represent the backwoods of New Zealand, and that the beautiful, dashing daring heroine, so aptly called “the Prairie Flower,” was probably a speaking likeness of Rona Mitchell. (11)

ローナと実際に会うまでのアリスにとっては、ニュージーランドもアメリカ西部も同じ「未開地」で区別なく、ニュージーランドの特殊性にも、ローナの個性にも目が向けられることはなかった。「大草原の花」というイメージに理想化されたローナに対する占有欲に燃えるアリスは、学友たちに “She’s to be my special property, my Prairie Rose!” (12) と宣言する。ニュージーランドは、1840年にイギリスの植民地にされ、1907年に自治領となり、1947年に独立したので、この作品が出版された1915年の時点では、自治権を持っているとはいえ、まだイギリスから独立してはいなかった。アリスによるローナの所有権の主張は、レベルは大きく異なるものの、当時の植民地支配の言説とどこか重なる部分がある。

しかし、これはあくまでも物語の発端にすぎず、生身のローナと交流する中で、アリスの幻想は失望へ、失望は理解へと変化していく。まずはユーモラスに描かれたアリスの失望の場面を見てみよう。

Alas! alas! for Ulyth’s illusions. The enchanting vision of the prairie flower faded, and Rona Mitchell stood before her in solid fact. Solid was the word for it – no fascinating cinema heroine this, but an ordinary, well-grown, decidedly plump damsel with brown elf locks, a ruddy sunburnt complexion, and a freckled nose. (13)

何とも愛嬌溢れる現実のローナの姿である。ここで注意したいのは、ローナの容姿や肢体が嫌悪を感じさせるものではなく、“solid” や “ordinary” という形容詞に表れているように、きわめて平凡でリアリスティックに描かれているということである。健康的で日焼けした現実のローナの姿に、幻想の入り込む余地はない。その後のローナの行動も、アリスの引き出し

を勝手に開けて覗いたり、写真や本をいじったりと、いわゆる「躰」はなされていないけれども、どこか憎めない罪のないものである。だが、大なる失望を味わうこととなったアリスは、“I’d rather have a bear cub or a monkey for a roommate!” (16) とミス・ボーズに訴え、心の中でローナを“this savage” (17) と呼ぶ。

そんなアリスをウッドランズ校のスタッフが諭し、彼女は次第に認識を改めていく。ミス・ボーズは、ローナへの不満をぶつけてくるアリスに対し、“Now let us look at the matter from her point of view.” (16) と、相手の立場から物事を見る必要性を説く。やがてローナの身の上話を聞くうちに、アリスのローナに対する感情は軽蔑から同情へと変わる。ローナが母親を亡くしていること、実際に会ったらアリスはローナに失望するだろうと父親から言われたことなどを聞いたアリスは、良心の呵責を感じ、自分がローナを“civilize” していこうと決意する。このアリスの決意は、「未開人」の「文明化」を自らの使命とし、それを大義として掲げて植民地支配を行った大人たちの帝国主義的所作をなぞるものである。素直に感謝してそれを受け入れるローナもまた、宗主国側が一方的に都合よく描く被支配者の姿と重なる。

こうして、アリスはローナの「教育」を手助けし始める。その教育の中心となるのは、ウッドランズ校に導入されているキャンプファイア・リーグというアメリカ発祥の組織の野外活動である。キャンプファイア・リーグとは、イギリスのスカウト運動が大西洋を越えてアメリカに渡り、その名称と形態が変化したものである。いわば逆輸入されるかたちでイギリスの女学校に採り入れられたキャンプファイア・リーグは、ウッドランズ校の女生徒たちにどのように受容されているのだろうか。

4. キャンプファイア・ガール

ウッドランズ校でキャンプファイア・リーグの指導にあたっているのは、学校の近所に住んでいるアーノルド夫人 (Mrs. Arnold) という若いアメリカ人である。彼女は結婚前にペンシルヴェニア州でキャンプファイア・リー

グの支援を熱心に行っていた。ミス・テディントンの依頼を受けたアーノルド夫人は、このアメリカの伝統をイギリスの女生徒たちに伝えることに喜びを感じている。ウッドランズ校の生徒たちは、この野外活動に夢中である。

To the pupils at the Woodlands this night's ceremony was a special occasion, for it was the autumn reunion of the Camp-fire League, an organization which, originally of American birth, had been introduced at the instigation of Miss Teddington, and had taken great root in the school. Any girl was eligible as a candidate, but before she could gain admission to even the initial rank she had to prove herself worthy of the honor of membership, and pass successfully through her novitiate. (23)

この一節の後半部分に書かれているように、キャンプファイア・リーグはすべての女生徒に対して開かれているが、入会するには、見習い期間をうまく乗り切り、メンバーとなるにふさわしいことを証明しなくてはならない。その際、女生徒の家柄や貧富の差は関係なく、個人の資質のみで判断される点には注目しておくべきだろう。

そもそも、スカウト運動は、裕福ではない家庭の子どもたちも参加できる組織であることを目指しており、とりわけガール・ガイドは、労働者階級の少女たちを主な参加者として想定していた²。よく知られているように、ボーイ・スカウトは1908年、イギリスで誕生した。創始者ロバート・ベーデン・パウエル (Robert Baden-Powell) は軍人で、1910年には妹アグネス (Agnes) とともにガール・ガイドを創設した。アグネスは、最初のガール・ガイド小説とされる『テリーはガール・ガイド』(*Terry the Girl-Guide*, 1912)の序文において、ガール・ガイドはあらゆる階級にとって魅力的なもので、ホッケーやクリケットなどの道具を揃える金銭的余裕のない家庭の少女たちもこの組織に参加することで、「名誉、フェアプレイ、無私を重んじる精神」(“a sense of honour, fair-play, and unselfishness” vi) を養うことができると

書いている³。

同じように、ガール・ガイドのアメリカ版であるキャンプファイア・ガールも、あらゆる境遇の子どもたちに門戸を開いていたようだ。アメリカでキャンプファイア・リーグが正式に設立されたのは1912年で、1912年から1930年代にかけて、キャンプファイア・ガールを主人公にした小説がさまざまな作家によって書かれた。たとえば、アイリーン・エリオット・ベンソン (Irene Elliot Benson) は、アメリカ人の少女エセル (Ethel) が母親の意に反してキャンプファイア・ガールになり、成長していく姿を描いたシリーズで人気を博した⁴。その第1作目『エセル・ホリスターはどのようにしてキャンプファイア・ガールになったか』(*How Ethel Hollister Became a Campfire Girl*, 1912) には、この組織の民主主義的なありようが描きこまれている。

主人公のエセル・ホリスターは、ニューヨークに住む16歳の少女である。ホリスター家はニューヨークで最も古い家柄のひとつであるが、経済状態は厳しく、エセルの母親は娘が条件のよい相手と結婚することに望みをかけている。ある日、エセルの従姉妹のケイト (Kate) が、エセルをキャンプファイア・ガールにしようと誘いにやって来る。キャンプファイア・ガールの指導者であるケイトは、まず、この組織が少女たちを健康でたくましくするものであることを強調する。

“Well, they become healthy and strong; they play all kinds of out of door athletic games; they swim, dive, undress in deep water, paddle or row twenty miles in any five days; they learn to sail all kinds of boats for fifty miles during the summer, ride horse back, bicycle, skate, climb mountains, and even learn how to operate an automobile.” (1)

自転車といえば、19世紀末以降、女性の活動範囲を広げるのに大きな役割を果たし、女性解放のひとつの象徴となったものである。これに対し、エセルの母親は、“...Now what good is all such exercise to a girl!” (1) と、イギリス

のヴィクトリア朝的な価値観を持つ古風な母親らしい警戒心をあらわにして反論する。

次に、ケイトは、キャンプファイア・ガールになれば、料理や買い物、洗濯、子どもの世話などができるようになり、有能な主婦になれるとアピールする。

“Why, it gives her the splendid health so necessary to every woman, and oh! If only you’d read about it. You won’t listen, but they learn how to cook, how to market, to wash and iron, and keep house, how to take care of babies, - and don’t you see if a girl marries a poor man she can be a help to him and not a hindrance? Then they have to be kind and courteous, to look for and find the beauties of Nature until work becomes a pleasure and they’re happy, cheerful and trustworthy. They give their services to others and learn something new all the time.” (1-2)

おそらくケイトは、ホリスター家の経済状況を考慮して、エセルが将来に備えてこのような知識や技能を身につけておいたほうがよいと判断したということだろう。しぶる母親に、彼女は、イギリスではスカウト運動は国の支持まで得ている立派な活動であると力説し、その規模の大きさを説明するために、“Why, boys are joining from every rank of life.” (2) と付け加える。

この民主主義的な性質こそ、エセルの母親が警戒していることだった。彼女は、“They *are* from every rank, and that’s why I object.” (2) と言い、“We are very poor and she must marry well and have her own establishment. All of this Camp Girl business would be of no earthly benefit to her.” (3) とケイトの誘いをきっぱりと退ける。ケイトは納得できずに、この組織が少女たちを「浮ついた蝶」(“frivolous butterflies”)ではなく「社会の有用なメンバー」(“useful members of society”)にするためのものだと主張する。

...“She’s going to revolutionize young women and make of them useful

members of society – not frivolous butterflies – and it will be carried into the poorer classes and teach girls who have never had a chance, so that they may become good cooks and housekeepers and love beautiful things...” (3)

この一節には、ガール・ガイドと共通するキャンプファイア・ガールの目指すところ—少女たちを有用な市民に育てること—が明確に示されている。最終的に、エセルは、キャンプファイア・ガールとなり、キャンプに参加してさまざまな境遇の少女たちと生活をともにし、彼女たちと同じ組織に所属する「姉妹」として助け合うことを学んでいくことになる。

『学校のために』においても、異なる環境（ここでは貧富の差ではなく、宗主国と（旧）植民地の違いであるが）で育ったウッドランズ校の女生徒たちが、主にキャンプファイア・リーグでの活動を通して、与えられた仕事をこなしながら、同じ共同体に属する仲間として協力することを学んでいく。習慣や価値観の異なる人々の集まりである共同体の中でどのようにふるまうか、全体を構成する一員としてどのように責任を果たしていくかを学ぶこと、すなわち市民教育が、この野外活動を通じて行われるのである。

5. 愛校心と愛国心

共同体の中でのふるまい方を知らない新入生ローナは、すでにキャンプファイア・ガールの活動を通して市民教育を受けているアリスら学友たちの助けを借りながら、団体精神というコードを内面化していく。アリスから、ローナはニュージーランドで何も学んできていない、と訴えられた指導者アーノルド夫人は、“She’s evidently raw material. Every diamond needs polishing” (25) とアリスを宥めるが、“raw material” という表現には、アリスの“civilize” という言いまわし同様、根底に帝国主義的な思想が感じられる。有能で魅力的な少女がダメな少女や「よそ者」を助けるというテーマは、女学校小説でもガール・ガイド小説でも常套ではあるものの (Cadogan

175)、ナショナリティの要素が絡んでくると、そこには少女小説のお決まりのパターンというだけでは済まされない政治性が潜むことになる。

キャンプファイア・ガールの活動の具体的な内容は、ロープ結び、応急手当、救助、料理、縫物などである。少女たちは、野外で生活するためのさまざまな知識や技能を身につけながら、団体行動を通して、共同体の一員としての自覚を持つように指導される。そのためにつくられた制度がふたつある。ひとつは、定められた知識や技能を身につけると、その証として分野別に色の異なるビーズを授与するシステムである。これは、努力して達成したことを眼に見えるかたちで評価することにより、少女たちのモチベーションを高め、自尊心を養うのに役立つ。もうひとつは、経験を積むごとに“Wood Gatherer”から“Fire Maker”へ、さらには“Torch Bearer”へと昇格していくシステムである。少女たちは段階的に与えられた仕事を着実にこなすことによって組織に貢献し、その貢献を認められることに誇りと喜びを感じ、組織にとって有用な人材になりたいと願うようになる。

つまり、キャンプファイア・ガールの活動でウッドランズ校の生徒たちが学ぶことを期待されているのは、共同体の一員としての自覚を持ち、自分の立場を考え、課された責任を果たすことである。これは、市民教育の根幹をなすもので、当時の女子教育改革の実践を多分に反映しているA.ブラジルの女学校小説に、少女たちが市民としての自覚を育てていくプロセスが描かれているということは、女性を「家庭の天使」であるばかりでなく「有用な市民」にする必要性が、当時のイギリス社会で認識されていたということの意味するだろう。

それを裏づけるような言説が、1912年に出版されたガール・ガイドの手引書『ガール・ガイドのためのハンドブック——少女たちはいかにして帝国建設の手助けができるか』(*The Handbook for Girl Guides: or How Girls can Help Build the Empire*)に見られる。アグネス・ベーデン-パウエルによって作成されたこの手引書のパート1に書かれている「ガイドの掟」(“The Law of the Guides”)の第2条は“A Guide is loyal to the King and to her officers, to her

mother and father, and to her employers”であり、第3条は“A Guide’s duty is to be useful and help others” (39) である。また、パート4は“Patriotism”と題されていて、その中に“Citizenship”という項目がある。そこには以下のようなことが書かれている。

If you want to serve your country, whether it is as a queen or as a maidservant, you must be efficient – that is, good at your work – and if you want to be that, you must be trained. This was the idea of the wonderful Queen Louisa of Prussia, who rendered such splendid services to the state.

And, Guides! Remember the future of our Empire lies in your hands.

It is in your power to make or to spoil the British nation. As you can see a nation is made up of individuals. If each person out of a hundred is bad, then the whole hundred are bad. So, if each and every single girl and boy in Britain is good and reliable, then the whole nation is good and reliable.

As women have the bringing up and teaching of the little ones, they wield a great power. As citizens, you can help to make every child into a good citizen. You can also help to keep up the moral standard of the nation. (413)

「将来の母親」としてのガール・ガイドに呼びかけをしていることも重要だが、ここでさらに注目すべきは、“our Empire”とあるように、帝国との関わりが強調されている点だろう。

手引書のサブタイトルが示しているように、ガール・ガイドは帝国建設を手助けする役割を期待されていた。パート1の“Frontier Life”という項目では、“many of you in Great Britain will some day go out to one of the British Dominions across the seas”(23) と、将来的に少女たちが（旧）植民地へ移住することを想定し、“times do come when you have to know how to milk the cow, how to cut firewood, and cook the food...and many other things which you are inclined at home to leave to others” (24) と予言して、“All these things you can learn as Girl Guide” (24) と締めくくっている。さらに、“You belong to the

great British Empire, one of the greatest empires that has ever existed in the world” (33) と、大英帝国の偉大さを説いたうえで、少女たちに自分もその一員であることを自覚するよう促し、“Therefore, in all that you do, remember to think of your country first” (34) と、自分のことより国のことを優先して考えるよう命じている。

少女たちに対するこのような要請を理解するためには、スカウト運動が何をきっかけに始まったものかを押さえておく必要があるだろう。サリー・ミッチェルによれば、ボーイ・スカウトは、主にボーア戦争で明らかになった問題に対処するためのものであった。

Scouting for boys was largely a response to problems revealed by the Boer War. A distressing number of recruits had to be rejected because they were undersized or sickly. In addition, home-front dissatisfactions raised concerns about loyalty in the social class that supplied soldiers and about “effeminization” and “degeneration” among officer class. Boy Scouts came into being to promote health, discipline, patriotism, and manliness. (117)

要するに、兵役に不適格と判断された男性の数の多さが危機感を生み、兵士を供給する階級＝労働者階級と将校となる中産階級・上流階級の男性たちの「健康、規律、愛国心、男らしさ」を高める方策が早急に必要とされた、ということである。敵と戦うためには、国内のすべての階級、ひいては大英帝国を構成するすべての「臣民」が協力し、一致団結しなければならない⁵。

このようなコンテキストを踏まえて『学校のために』を読むと、ウッドランズ校の女生徒たちが口にする「学校のために」という言葉の背後に広がる言説が見えてくるようである。そして、この作品が第一次世界大戦中に出版されたこと、第一次世界大戦では、(旧) 植民地の国々から多くの戦争協力がなされたことを考え合わせると、ニュージーランドから来たローナがウッドランズ校の価値観を受け入れ、その一員として融合してい

くエピソードからは、戦時のイギリス社会が発するメッセージが読み取れるのではないだろうか。軍隊のイメージは、この女学校小説に散見される。たとえば、ウッドランズ校のキャンプでは“Strict military discipline was observed in the camp, and the sentries were told off on duty. In as perfect order as a regiment the girls went to their tents” (125) と、「軍隊のような厳格な規律が遵守され」、女生徒たちは「連隊に劣らない完璧な秩序正しさと」各々のテントへ向かう。

ピクチャレスクな「楽園」＝ウッドランズ校で展開される少女たちの「成長」と「融合」の物語は、このように当時の政治・社会的コンテクストにおいて解釈すれば、のどかな学園小説とは異なる様相を帯びてくる。政治とは無縁のように見えるものにこそ、実は強烈な政治性が潜んでいるのかもしれない。

6. おわりに—コモンウェルスと市民教育

イギリス教育省が設置した市民教育のための諮問委員会は、1998年にクリック・レポートを発表した。このレポートには、シティズンシップ財団が、市民教育を「いかに個人として全体に関わり合うかについて学ぶこと」と定義したことが記されている(長沼 120)。また、イギリスの国民性として「多様性への寛容」を挙げ、市民教育は「あらゆる民族や宗教が有する独自性に共通する土台をつくりあげる役割を有する」と述べ、「イギリスにおいては多文化的な市民という考え方が明確に示されなければならない」という全国調査に基づく提言に触れている(長沼 134)。

イギリスでは2002年から、中等教育段階で市民教育が必修教科となった。それを実践する基盤となったのがこのクリック・レポートである。周知のように、イギリスは長きにわたって植民地支配を続けてきたが、1948年にイギリスの市民権をコモンウェルスのすべての人々に認める国籍法(Nationality Act)を可決した(Byrom 127)。すなわちコモンウェルスを構成する8億人もの人々にイギリス入国への扉を開いたのだ。こうしてコモン

ウェルスの国々から多くの移民を受け入れ、多文化社会となったイギリスでは、「多文化的な市民」を育成するための市民教育を行うことが急がれたのである。

本稿でとりあげた『学校のために』という20世紀初頭の女学校小説では、キャンプファイア・リーグという野外活動を通して、女生徒たちが学校の中で構成員のひとりとしてどのようにふるまい、協力し、融合していくかを学ぶプロセスが描かれている。(旧)植民地ニュージーランドからの新入生ローナは、宗主国イギリスの学校のコードを内面化することで学友たちから認められる。一方、アリスらイギリスの女生徒たちは、最初はローナを侮蔑しながらも、やがて彼女を「文明化」することを自らの責務と考えてローナを受け入れていく。

このプロットは、クリック・レポートの提言を先取りするかのようなものである。というよりも、20世紀前半の時点ですでに「多文化的な市民」を育成する必要性が認識されていた、と言うほうが正確なのかもしれない。ふたつの世界大戦を経て、植民地が相次いで独立へ向けて動き出し、大英帝国が終焉を迎え、やがてコモンウェルスという緩やかな連合体が形成されていく一連の動きが始まる前の過渡期に書かれた『学校のために』という小説は、イギリス社会が多文化社会へと向かって進んでいくことを示す予兆のひとつと捉えることが可能ではないだろうか。

註

1. たとえば、ブラジルの *The New Girl at St. Chad's* (1912) では、主人公のオナーが生まれ育ったアイルランドの屋敷を出て、イングランドの女子寄宿学校に入学する。オナーは、寮のシンボルカラーであるオレンジ色のリボンがついた帽子を渡されるが、自分はナショナリストだからユニオニストのカラーであるオレンジ色のものは身につけられない、と反発する。
2. 藤本茂生は、アグネスが中心となってつくりあげていったガール・ガイドは、創設当初、「運動の対象を労働者階級の少女たちに絞ったが、これが中

産階級の少年たちをターゲットにした兄のボーイスカウト運動との最大の相違であった」と述べている(12)。しかし、サリー・ミッチェルが“Scouting evidently appealed to girls of all classes.”(122)と指摘するように、ガール・ガイドはあらゆる階級の少女たちを惹きつけた。

3. 小説や雑誌など、ガール・ガイド文化の広がりについては、Mary Cadogan, *Mary Carries on: Reflections on Some Favorite Girls' Stories*, 172-178 参照。
4. ベンソンの作品には他に *Ethel Hollister's First Summer as a Campfire Girl* (1912)、*Ethel Hollister's Second Summer as a Campfire Girl* (1912)、*Campfire Girls in the Forest* (1918)、*Campfire Girls' Lake Camp* (1918)、*Campfire Girls Mountaineering* (1918)、*Campfire Girls' Rural Retreat* (1918) などがある。また、マーガレット・ヴァンダークック (Margaret Vandercook) も *The Camp Fire Girls at Sunrise Hill* (1913)、*The Camp Fire Girls Amid the Snows* (1913)、*The Camp Fire Girls Across the Sea(s)* (1914)、*The Camp Fire Girls in the Outside World* (1914)、*The Camp Fire Girls' Careers* (1915) といったキャンプファイア・ガール小説を書いている。
5. 田中治彦によれば、スカウト運動が軍事訓練か市民教育かという議論は「設立の当初からあり、現在でも研究者の間で交わされている最も重要な議論である。これを扱った最近の研究者八人のうち、六人はバーデン-パウエルは青少年の軍事訓練を意図したものであり、良き市民性を育てるという目標は副次的で本来の目的を糊塗するものであると結論している」(159)。

参考文献

- Andrews, Malcolm. *The Search for the Picturesque*. Stanford University Press, 1989.
- Baden-Powell, Agnes. *The Handbook for Girl Guides: or How Girls can Help Build the Empire*. The Girl Guide Association, 1912.
- Benson, Irene Elliot. *How Ethel Hollister Became a Campfire Girl*. 1912. Dodo Press, 2007.
- . *Ethel Hollister's Second Summer as a Campfire Girl*. 1912. Dodo Press, 2007.
- Brazil, Angela. *The New Girl at St. Chad's*. 1912. Dodo Press, 2008.
- . *For the Sake of the School*. 1915. Dodo Press, 2008.
- . *A Patriotic Schoolgirl*. Blackie and Son Limited, c.1918
- Byrom, Jamie, et al. *The Impact of Empire*. 2nd ed., Hodder Education, 2008.

- Cadogan, Mary. *Mary Carries on: Reflections on Some Favorite Girls' Stories*. Girls Gone By Publishers, 2008.
- Cohen, Susan. *The Scouts*. Shire Publications Ltd, 2012.
- Craig, Patricia, editor. *The Oxford Book of Schooldays*. Oxford University Press, 1994.
- Dyhouse, Carol. *Girls Growing up in Late Victorian and Edwardian England*. Routledge, 1981.
- Freeman, Gillian. *The Schoolgirl Ethic: Life and Work of Angela Brazil*. Allen Lane, 1976.
- Goodman, Joyce, and Jane Martin, editors. *Gender, Colonialism and Education: The Politics of Experience*. Woburn Press, 2002.
- Hampton, Janie. *How the Girl Guides Won the War*. Harper Press, 2010.
- Jusová, Iveta. *The New Woman and the Empire*. The Ohio State University Press, 2005.
- Mitchell, Sally. *The New Girl: Girls' Culture in England 1880-1915*. Columbia University Press, 1995.
- Moore, Dorothea. *Terry the Girl-Guide*. Nisbet & Co. Ltd., c.1912.
- Mounfield, Anne. *Women and Education*. Wayland, 1990.
- Nelson, Claudia, and Lynne Vallone editors. *The Girls Own: Cultural Histories of the Anglo-American Girl, 1830-1915*. The University of Georgia Press, 1994.
- Quigly, Isabel. *The Heirs of Tom Brown: The English School Story*. Chatto & Windus Ltd, 1982.
- Richardson, LeeAnne M. *New Woman and Colonial Adventure Fiction in Victorian Britain: Gender, Genre, and Empire*. University Press of Florida, 2006.
- Robinson, Jane. *Bluestockings: The Remarkable Story of the First Women to Fight for an Education*. Penguin, 2009.
- Smith, Michelle. *Empire in British Girls' Literature and Culture: Imperial Girls, 1880-1915*. Palgrave Macmillan, 2011.
- Tinkler, Penny. *Constructing Girlhood: Popular Magazines for Girls Growing up in England 1920-1950*. Taylor & Francis, 1995.
- Vandercook, Margaret. *The Camp Fire Girls at Sunrise Hill*. 1913. Dodo Press, 2007.
- 新井潤美『パブリック・スクール——イギリスの紳士・淑女のつくられかた』岩波書店、2016年。
- 河村貞枝・今井けい編『イギリス近現代女性史研究入門』青木書店、2006年。
- 滝内大三『女性・仕事・教育——イギリス女性教育の近現代史』晃洋書房、2008年。
- 田中治彦『ボーイ・スカウト——二〇世紀青少年運動の原型』中央公論社、1995年。
- 富山太佳夫「探偵とボーイ・スカウト」『ダーウィンの世紀末』青土社、1995年、253-265。
- 戸矢理衣奈『下着の誕生——ヴィクトリア朝の社会史』講談社、2000年。

長沼豊、大久保正弘編著『社会を変える教育 Citizenship Education——英国のシティズンシップ教育とクリック・レポートから——』Keystage21、2012年。

平田雅博『ウェールズの教育・言語・歴史——哀れな民、したたかな民』晃洋書房、2016年。

藤本茂生『ボーイスカウトとガールスカウト運動の誕生——第1回：英国の初期文献・資料集成』別冊付録、Eureka Press、2012年。

矢口徹也『女子補導団——日本のガールスカウト前史』成文堂、2008年。

* 本稿は、2013年8月の第13回テキスト研究会大会（甲南女子大学）における研究発表の原稿に大幅な加筆・修正を施したものである。